

山口市芸術家育成支援事業

第2回やまぐち新進アーティスト大賞

第2回やまぐちACS賞 (*The Artist of Citizens Selection*)

参加アーティスト数：9名

最終選考 候補者：4名

チーク パッチ (47)

大和 猛 (46)

山根 秀信 (50)

渡邊 陽子 (33)

(50音順・敬称略、年齢基準日：審査日)

(総評)

2回目の大賞審査会は各委員割当3票の投票の結果、複数票以上獲得した4名(受付順にチークパッチ・大和猛、渡邊陽子、山根秀信)に絞り選考が進められた。新しく会に参加された彫刻家田中米吉氏を含め、各委員のフリートーク方式による選考は、作家作品論は勿論のこと、賞の性格づけ、あり方等についても掘り下げながら深まりのある議論の場となった。結果として満場一致、大賞は渡邊陽子さんが選出された。

選考後、心に強く残ったことは、世界の動向と軸を一にするようにここ山口の地にもいろんなアートの流れが混じり合いつつあるということである。

選ぶ側にとっても「学びの場」となった。

(第2回やまぐち新進アーティスト大賞審査委員会審査委員長 足立明男)

(やまぐち新進アーティスト大賞選評)

薄造りながら凹凸感のある連続模様がみせる視覚的な強さに、この作家のかたちを紡ぐ思念の深さが重なる。それは、素材である土の表面に既存の模様を押しつけることで得られる、借り物的装飾の背後に、作り手の内奥に秘められたナイーブな心性の強靱さを予見させるからだろう。

器表に施された華やかな借り物的装飾技法は、一見するとガーリッシュ(garish)。しかし、ここに野放図な奔放さや繁褥さは覚えない。整齐花冠のごとく配されたそれらの模様は、無紋の器面との間にほどよい緊張関係をもたらし、彩りも白素地に一色だけと抑えられているからだ。そしてこのノーブルな装いのうちに、器形に包まれた内なる精気の充満、つまりかたちの生命の抑揚が暗示されている。

こういった渡邊の表現手法は、過剰と抑制、饒舌と寡黙といったような、二律背反的な感覚の共存ということを目指して導かれたと捉えられる。素材である土や釉の物質性に起因する視覚的触覚を手がかりにそれらを整序し、自己の心性に違ふことなくかたちを立ち上げていこうという造形思考は、今後、技術的練度の向上にともない更に確実なものとなっていくだろう。

(第2回やまぐち新進アーティスト大賞審査委員会審査委員 石崎泰之)

・・・第2回やまぐち新進アーティスト大賞審査委員会審査委員・・・

足立 明男 (山口情報芸術センター館長)
井生 文隆 (山口県立大学教授)
石崎 泰之 (山口県立萩美術館・浦上記念館学芸課長)
今井 徹也 (建築家)
田中 米吉 (彫刻家)

(50音順・敬称略)

・・・第2回やまぐちACS賞審査委員会審査委員・・・

市民審査委員12名

・梅原 望 ・岡村千代子 ・北口 絢章 ・清水 大輔
・曾田 元子 ・竹部 徳真 ・田村由紀子 ・中田 禎子
・野村 郁子 ・平尾 恵 ・藤井 裕子 ・安田剛史郎

(50音順・敬称略)

「第2回やまぐち新進アーティスト大賞」 「第2回やまぐちACS賞」

受賞者（アーティスト名）：渡邊 陽子
肩書き：陶芸家

PROFILE

1976年岡山県津山市生まれ、山口育ち（33歳）。山口市矢原在住。2000年、京都市立芸術大学美術学部工芸科陶磁器専攻卒業（卒業制作展/『富本賞』受賞）。在学中にイタリアのファエンツアの工房にて研修。帰国後大学へ復学。ギャラリーなどでの作品の発表を始める。卒業後、京都にて個展等の作家活動を行う。2003年、活動の拠点を山口へ移す。2007年、第1回現在形の陶芸・萩大賞展 佳作。現在、県内外で個展を中心に活動中。

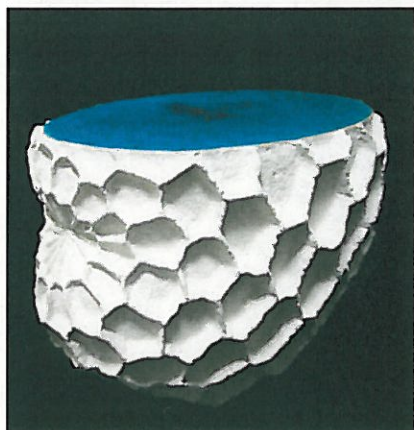


受賞コメント

街路樹の落した種子の束の間の孤独と、その固い殻の中で出番を待つエネルギーについて考えたことがこの作品をつくるきっかけとなりました。このたび、「やまぐち新進アーティスト大賞」をいただきましたこと大変感激しております。山口に制作の拠点を移し7年、私の活動に対し力強く背中を押していただいたような気持ちです。これまで支えて下さった方々に心から感謝いたします。ありがとうございました。

また、「やまぐち新進アーティスト大賞」のみならず「やまぐちACS賞」にも選出していただき本当にありがとうございました。市民の方々に支持されて選出される賞を受賞できたこと、大変心強く思います。今後も山口市を拠点に制作活動に邁進していきたいと思っております。

（やまぐち新進アーティスト大賞審査対象作品）



（やまぐちACS賞審査対象作品）

